GARIA
622-635

Ver. 0.1

一．書の記述　～ガリア年代記～
二．誘い　～ガリア世界～
三．英雄達の肖像　～戯曲の紡ぎ手～
四．路の標　～旅の手引き～
五．紡がれし物語　～ガリア戦史～
六．或る抜け落ちた頁

書の記述

～ガリア年代記～

ブリタニア歴	
前100年頃	都市国家ロマーナ、周辺への侵攻を開始
前50年頃	ローマン・ガリア帝国成立
前20年頃	ガリア帝国、ブリタニアに上陸
元年	ブリタニア全土がガリア帝国により平定。
100年頃	北方民族の侵入が激化
400年頃	ローマン帝国、ブリタニアより撤退
	この間、ブリタニアに統一王国はなく、小国が乱立する。動乱時代
562年	アヴァロン朝ブリタニア王国成立
598年	ブリタニア女王アン・ギネ・アヴァロン即位。
618年	ローザ・ギネ・アバロン、冬薔薇に対して反旗を翻す。薔薇戦争開始。
620年	薔薇戦争終結。ローザ・ギネ・アバロン、ブリタニア女王に即位。薔薇の宣誓
622年	フランドル王国軍、隣国ベルガに侵攻。ヴェルケンラーテの戦い。ベルガ王国滅亡、プロイツェンの支配下に。一部ベルガ人がフランドルに亡命。

624年	フランドル、プロイツェンに対して宣戦布告。南部国境レイン川において、プロイツェンに対して大規模な戦闘（オッフェンブルグ会戦）。その間隙を付いて、別動部隊が旧ベルガ領を突破、プロイツェン国内に侵攻、電撃的な勝利を収める。プロイツェン王国、フランドルにより併合。
625年	フランドル王国、ロマーナ教皇の要請を受けイターニア北部のロンバルド王国に侵攻。アルパイン越えにおいて多数の損害を受けるものの、亡命ベルガ人部隊の奮闘により山脈を突破、ロンバルドを平定。ロバルド辺境領を設置し、辺境伯を派遣する。イターニア南部地域とは不可侵条約を結ぶ。
626年	フランドル王国、カスティリアへ侵攻。ただし、ピレーネ山脈中央部から東部を越えるコースではなく、山脈西部に位置するアストゥリアス公国を外交戦略により傘下とし、その領内を通ってカスティリアに侵入。先遣隊である亡命ベルガ人部隊がアラゴン平原にてカスティリア国軍北方守備隊を殲滅。フランドル国王、アラゴン平原からアストゥリアス公国にかけての範囲を支配下とする。
627年	ロマーナ教皇、崩御。跡を継いだ教皇により、フランドル国王キルデベルドの、神聖フランドル帝国皇帝への即位が宣言される。これ以降、聖キルデベルドVI世を名乗る。同年、ブリタニアに対して宣戦布告。帝国軍は優勢であったが、客将・アルバレス将軍の亡命により戦線は膠着。

628年	ブリタニア国軍が攻勢を強める。ガリア本土においても、旧プロイツェンを中心に反乱が相次ぐ。ブリタニア王国軍、王都ロンドン奪還。
629年	帝国軍、ブリタニア国内より撤退。ロンバルド辺境伯領、フランドル帝国に対して独立を宣言。カスティリア王国、アラゴン平原を奪還。
630年	ブリタニア王国軍、ガリア本土に上陸。プロイツェン、ロンバルドと連合し、帝国領(旧ベルガ領)ラ・ベル・アリアンスにて帝国軍と会戦（第一次薔薇会戦）。連合国軍の勝利。第一回ヴェルセーヌ休戦協定会議が開催されるも、不調に終わる。ルーアン郊外においてブリタニア王国軍とフランドル帝国軍が会戦（第二次薔薇会戦）。ブリタニア王国軍、一部の部隊を残して、ブリタニア本土へ撤退。 この間、ガリア本土で、フランドル帝国と反乱勢力の戦い。フランドル本国、ロンバルド領では帝国勢力が、旧ベルガ領では反乱勢力が勢力を伸ばす。
633年	ブリタニア王国とフランドル帝国の両海軍による制海権争い。ブリタニア軍、旧ベルガ領北部、レイン川河口地域よりベルガ本土に再上陸。
634年	ブリタニア・ベルガ連合軍、フランドル帝国軍とオッフェンブルグにて会戦（第二次オッフェンブルグ会戦）

635年	ブリタニア・ベルガ連合軍、フランドル帝国領内に侵攻。別働隊は、ロンバルド辺境伯領を平定。ランス郊外にて、ブリタニア軍、帝国軍と会戦（ランス会戦）。 第二回ヴェルセーヌ休戦協定会議。ヴェルセーヌ条約発効。ガリア連合王国、建国。
636年	ベルガ王国領ヴェルケンラーテにて、ブリタニア女王ローザ・ギネ・アヴァロン、ルーナ・バラッドと邂逅

誘い
～ガリア世界～

・・・現在とも 過去とも 知れぬ所・・・

・・・響くは 二胡と月琴の旋律・・・

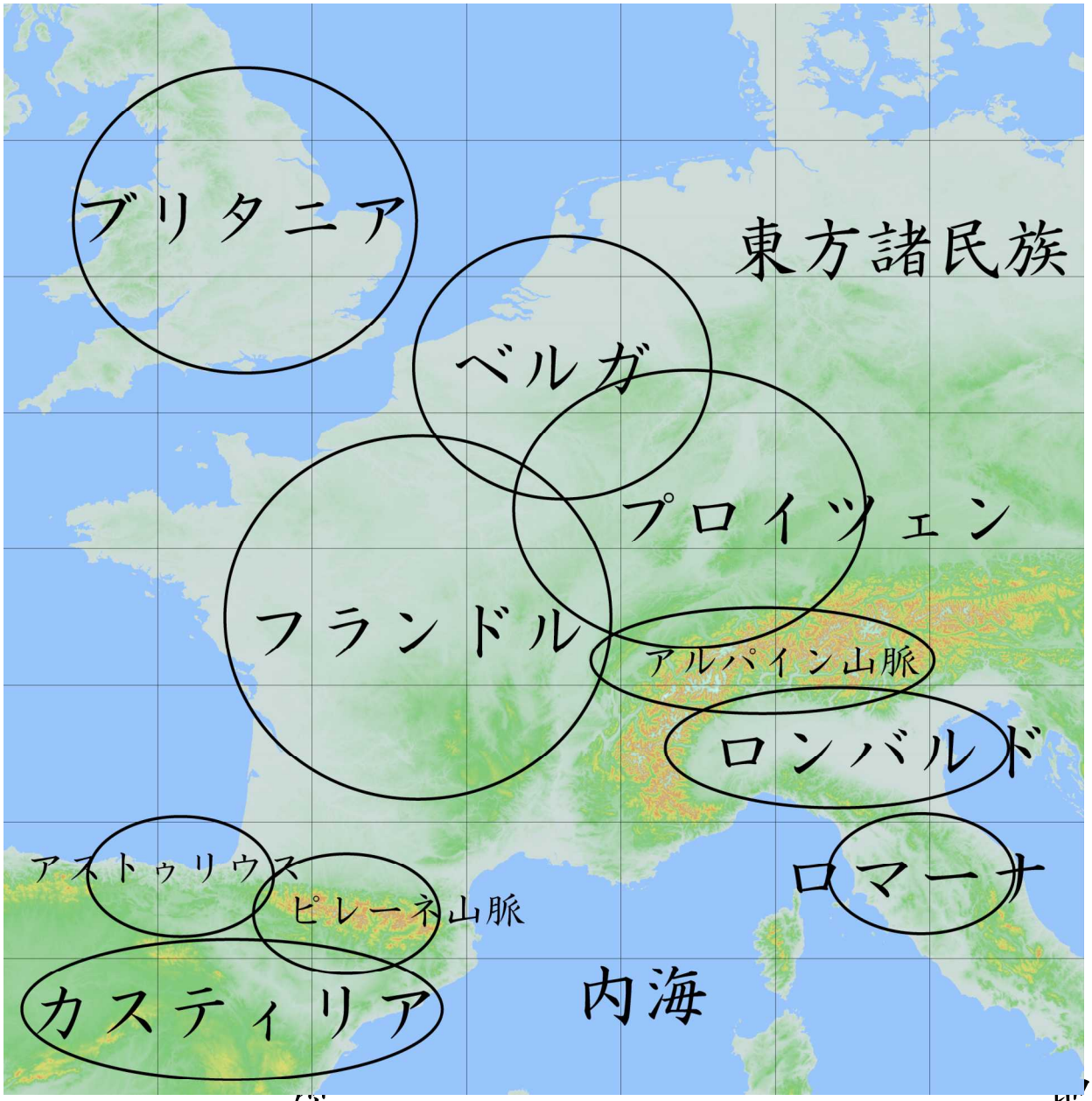
・・・今宵の語り部は 異国の盲目の老女・・・

これより歌うは 遥か遠き国の詩

山を越え 砂漠を越え 草原を越え
彼方西域の 其の彼方
天尽き 地果つる所

深き森と 碧き大河
凍れる銀嶺と 石造りの街
峨利亜と呼ばれし 国々の物語

いずれ歴史が全てを葬り去ろうとも
今は唯… 瞳を閉じて聴いておくれ・・・



地理

ガリアとは地域の名である。ローラシア大陸の西端に位置し、東端をどこにするか緒論があるものの、北、西、南は海によって分断されているため、範囲を確定しやすい。

一般に、東端はプロイツェン王国の領土の東端と同一視されている。また、ガリア本土から海洋を隔てて位置するブリテン島もガリア地域に含められる。ブリタニア歴 600 年代前半においては、ガリア中央部をフランドル国王とプロイツェン王国が占め、周囲に、ベルガ、ロンバルド、ブリタニア、カスティリアなどの諸国がある。

南部にはイターニア半島との境界にアルパイン山脈、南西部にはイベーリカ地方との境界にピレーネ山脈があり、中央部にはレイン川が位置する。地勢は概ねなだらかである。

歴史

ガリアの歴史は、イターニアの一都市国家であったロマーナの興隆を起源とする。かつてガリア周辺における政治と文化の中心は、内海（メディティレーニア）沿岸諸国であった。内海における覇権闘争に勝利したロマーナは一都市国家から、

内海を支配する海洋帝国へと成長した。

この帝国、ローマン帝国は内海の覇権を強固な物にすると同時に、ガリア地域へと侵攻を開始する。それまで未開の後進地域であったガリアは、これ以降、歴史の表舞台に上がることになる。ローマン帝国は内海の南岸、イベーリカ半島、ブリテン島を支配下とした時を絶頂とし、それ以降衰退の道をたどることとなる。が、ガリアにおいては、ローマン帝国の支配下において現存する国家の骨格が形作られた。

比較的早くにローマン帝国の勢力外となったブリテン島とイベーリカ半島はそれぞれ独自の文明圏、もしくは他の文化圏の支配下となったが、それ以外の地域は、それぞれ独自性を持ちながらも、類似した文化を持つこととなる。また、ローマン帝国滅亡後、ガリアにおいて大国といわれる国家は、フランドル地域とプロイツェン地域を中心として成立することが多く、ガリアにおける覇権は、主にこの両国により争われる。

宗教

ローマン帝国が、その治世の後期において「時の主」を信仰する宗教を国教としたこともあり、これがガリアにおける一般的な宗教となっている。

但し、イベーリカ半島は「ムハマンドの教え」を信仰する宗教国家の支配下にあり、ブリテン島は「時の主」信仰の影響を受けつつも「光の女神」を主神とした独自の多神教信仰が一般的である。

国家

フランドル王国

ガリアにおける大国の一つ。東をレイン、北と西を海、南をアルパインとピレーネの両山脈、そして内海により隔てられており、他国との境界が確定しやすい。そのため、国政も主に内政を主眼におく傾向があり、対外的な戦争もプロイツェン王国との国境紛争程度であった。しかし、キルデベルドΣ世が王位に王位に就いたことにより、ガリア全土を巻き込む戦乱において、その中心を占める事となる。

プロイツェン王国

フランドルと並ぶ、ガリアの大国の一つ。東方国境を乱立する小国家群と接するために、何らかの交戦状態にあることが多く、国政も対外的な戦略を主眼とすることが多い。近年は、東方国境の安定化と、西方においては、かつて支配下にあったベルガ王国を再征服が政治的な目的とされている。

ベルガ王国

近年、勃興した国家であり、国家としてのは長くはない。元来はプロイツェン王国の支配下にあったが、フランドルの助力もあり独立、以降、同国とは同盟関係にある。国土の大部分は森林であり、さほど豊かとは言えないが、二大国家に挟まれていることもあり、戦略的な意義を持つ。

なお、アルヴァレス家は、独立戦争において特に功績のあった王弟の家系であり、現在は王位継承権はないものの、多くの尊敬を集めている。

ブリタニア王国

ガリア本土とは海峡を挟んで位置する島国である。ローマン帝国が最大版図を示した当時には帝国の領土内であったが、それ以降は統一国家も成立せず、ガリア本土との交流もそれほど無い状態が続いていた。また、アヴァロン朝により統一される侵入、国内的な政治の不安定などが続いていた。

ブリタニア歴600年代前半においても、冬薔薇ことアン女王と、第一位王位継承権を持ったローザ王女との間で王権を巡り争いが起きたばかりである（薔薇戦争）。ただし、この戦争の終結後は安定した状態にあり、国力の回復に努めている。

英雄達の肖像

～戯曲の紡ぎ手～

ベルガ王国

アルヴェール・アルヴァレス

ベルガの名門、アルヴァレス家の第二公子。部門の誉れの高い同家においても、特に将来を嘱望された人材であった。とはいうものの、本人は第二子という事もあり、比較的気さくで、平穏を望む人柄でもあったようである。決して高い身分とは言えない女性とのロマンスが伝えられているだろう。平穏な時代であれば、国境紛争等で武勲をあげるものの、それは歴史における一挿話で過ぎなかったと思われる。皮肉なことに、戦乱の時代であるが故に、彼の名前が後世まで語り継がれることとなる。

また、故国ベルガを深く愛し、再興を望みながらも、彼自身はベルガ軍、フランドル軍、ブリタニア軍と流転を繰り返すこととなる。

ガリア動乱の前半における代表的な軍事活動の全てに関わったといっても過言ではない。初陣であるヴェルケンラーテ会戦でこそ、圧倒的な戦力を誇るプロイツェン王国軍に苦杯を飲まされる。その後、親兄弟と共に、フランドルに亡命、亡命ベルガ人部隊を率いてオッフェンブルグ会戦に参戦。甚大な被害を受けるものの、プロイツェン軍撃破において大きな功績を残す。その後も亡命ベルガ人部隊を率いて、ロンバルド遠征におけるアルパイン越え、カスティリア遠征における敵中単独侵攻など、数多くの武勲を残す。

ブリタニア歴627年のブリタニア遠征において、ブリタニア女王ローザ・ギネ・アヴァロンと邂逅し、彼女に忠誠を誓うこととなる。以降、ブリタニア王国軍に所属することになるが、戦場における活躍よりも、戦略の立案、部隊の運用と、女王ローザの軍師的な役割を果たすことが多くなる。これは、ブリタニア王国軍の諸将との間に無用な軋轢を生むことを嫌ったと共に、かつては仕えた帝国軍に刃を向けるのを躊躇したという見方もある。

故国ベルガ領で行われたラ・ベル・アリアンス会戦においては、連合国軍の総指揮官として活躍し、帝国軍を撃破、第一回ヴェルセーヌ休戦協定会議への道筋をつけることに成功する。これが彼の最も大きな、そして最後の武勲となった。

休戦協定会議の会場となったフランド
ル帝国ヴェルセーヌ離宮において、長年
にわたる宿敵であり、そして僚友でもあ
ったこともあるゲーフェンバウアーによ
って暗殺される。

プロイツェン王国

ゲーフェンバウアー

プロイツェン王国随一の驍将と称される人物である。30代半ばで、軍人として脂の乗った年代でもある。ガリア動乱前半において、最も運命に弄ばれた人物ともいわれる。そもそも、ブリタニア歴620～630年代におけるガリア動乱は、彼自身が指揮するプロイツェン王国軍がベルガ王国に侵攻したことに端を発する。そのヴェルケンラーテ会戦においては圧倒的に勝利する。しかし、その二年後、プロイツェン・フランドル国境のレイン川を挟んで行われた一連の会戦（オッフェンブルグ会戦）においては、ヴェルケンラーテにおいて下したはずのベルガ人部隊により苦杯をのまされ、フランドルの捕虜となる。その後、神聖フランドル帝国によるブリタニア遠征まで、歴史の表舞台から姿を消すこととなる。

ブリタニア遠征においては第三陣の副将を務めるが、主将たるアルヴァレスがブリタニアに亡命したため、それ以降第三陣の指揮を執ることとなる。当初は戦術的な勝利を収めるものの、ガリア本土における反乱の拡大、補給の停滞などにより、次第に劣勢に追い込まれ、最終的にはブリタニア放棄を余儀なくされる。

ラ・ベル・アリアンス会戦においては一軍を指揮し奮戦するものの、大勢を覆すには至らなかった。会戦後のベルセー

ヌ休戦協定会議において突然の凶行に及び、アルヴァレスを殺害。その場でブリタニア軍将軍、パーシファルにより討ち取られる。

人物としては質実剛健、無骨であったものの、決して冷酷ではなく、公正明大だと伝えられる。また、「時の主」の敬虔な信徒であり、特に同教の信徒たちからの信望は厚かった。時に他教徒に対する凶行が伝えられることもあるが、これも信仰心の強さによるものかも知れない。

アルヴァレス暗殺の動機については、親族の復讐、皇帝による密命、「時の主」教団の一部勢力による教唆など、諸説ささやかれているが、真相は不明である。

小ゲーフェンバウアー

ゲーフェンバウアーの兄、ヨハンの長男であり、ガリア動乱後期において活躍する勇将である。父はオッフェンブルグ会戦において戦死しているため、それ以降、ゲーフェンバウアーに従い、戦場を往来する。初陣は神聖フランドル帝国によるブリタニア遠征であり、その意味ではプロイツェン軍人と言うよりも、帝国軍人といった方が正確かも知れない。その為人はゲーフェンバウアーに比べると闊達で、気さくな性格だったと伝えられ、無骨で孤立しがちであった叔父と、新参の部下との間を取り持ったとも伝えられる（当然、古参の部下はその辺を解っているので大丈夫）。

軍人としても人物としても、叔父を敬愛し、目標としていた。そのため、ヴェルセーヌにおける暗殺劇を信じることが出来ない。それゆえ、ブリタニア女王ローザと、パーシファルに対して敵愾心を持っている。

ゲーフェンバウアー亡き後は、彼の麾下にあった黒騎士団の指揮を引き継ぎ、戦場や旧プロイツェン領の慰撫に功績を残す。また、戦場においては、ブリタニア軍のパーシファル将軍と数々の名勝負を演じることとなる。

プロイツェン国王カール・グスタフ・リンデンバウム

ガリアの二大国の一つ、プロイツェンの王であるカール・グスタフは、軍事国家の国王としての名に恥じず、豪放磊落な為人であり、体躯も威風堂々、赤髪、赤髭の偉丈夫である。ブリタニア女王ローザは、アルヴァレス将軍を「熊のような大男だと思った」と言ったと伝えられているが、プロイツェン王にあった際に、「本当の熊とは、彼のことを言うのよね・・・・。」とつぶやいたとも伝えられる。

その治世、政略を見る限りにおいては、突出した功績を残してはいないが、また一方で、悪政を行ったとも言うことも無い。常に紛争状態にあった東方国境を平定し、西方のベルガ国境に出兵したことを考えれば、優秀な君主であったということも出来るだろう。ただし、同時代にフランドル国王キルデベルドVI世と、ブリタニア女王ローザ・ギネ・アヴァロンという傑出した君主が二人もいたため、影が薄くなったことは否定できない。

ブリタニア歴622年におけるベルガ出兵は、彼にしてみれば、一定の領土拡張ができればそれで良し、という程度の認識であったようである。結果としてベルガを得ることが出来たため、その版図はプロイツェン王国としては最大となった。

しかし、624年にはその拡大した領土を通してフランドル軍の本土への侵入を許し、彼自身も虜囚となる。

フランドル王国（神聖フランドル帝国）

フランドル国王キルデベルドVI世

もう一つの大国、フランドル王国の国王。ガリアにおける動乱は彼により演出されたと言うことも出来る。プロイツェ

ン王ほどではないが、それでも堂々とした体格であった。為人は冷静沈着、一歩間違えれば冷酷といわれかねない程であった。常に何事かを思慮し、眉間の刻まれた深いシワが無くなることはなかったという。ただし、それも生来のものではなく、望まないにもかかわらず巻き込まれた王位継承権闘争において、身についてしまったものだと言われる。

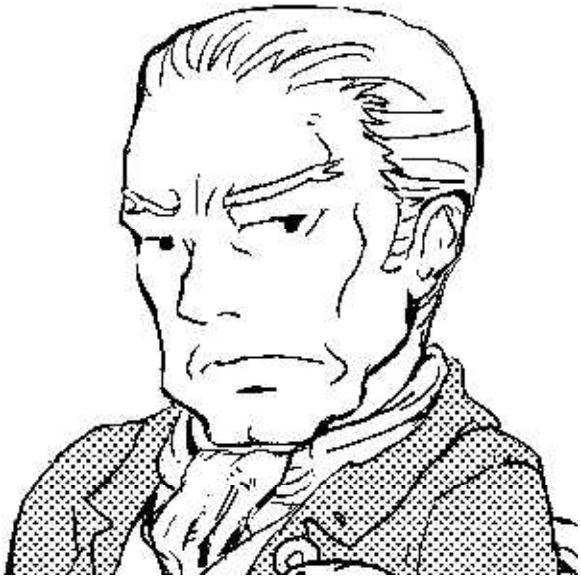
同時代の他の王が、国内の安定や領土の拡張を目指していたのに対して、キルデベルドVI世の目標とする所は、さらに先にあったようである。すなわち、ブリタニア歴627年に宣言された神聖フランドル帝国の建国は、当初より予定していた節がある。その意味で、この時代で唯一人、ガリア全体という視点を持っていた人物かも知れない。

例えば、領土的には重要な価値もなく、戦術的には困難を極めるアルパイン越えを行ってまで、ロンバルドを攻略したのは、教皇の名により「神聖皇帝即位」を宣言させるためだったと言え、すなわち、ガリア全土を統べる帝国の建国を目指していたことが伺える。

その為人でもふれたように、極論すれば冷酷な性格であり、謀略を用いることも多く、目的のためには手段を選ばない人物であった。しかし一方で、出自、国家などに拘らず有能な人物であれば積極的に登用し、能力にふさわしい地位に就ける事からも解るように、公正な人物であったことは疑いない。

その治世の前半、ブリタニア遠征までは順調に領土を拡張した。しかし、連年の遠征による国力の疲弊、周辺諸国における反乱などにより、領土拡張戦略は、一時断念を余儀なくされ、逆にブリタニア王国による侵攻を受けることになる。

ラ・ベル・アリアンス会戦においては、敗北を喫するものの、巧みな外交戦略によりヴェルセーヌ休戦協定会議への道筋をつける。しかし、ゲーフェンバウアーの暴挙により会談が不調に終わると、一転して連合国軍内の分断を画策、ブリタニアの孤立に成功し、ルーアン会戦において、ブリタニア軍のガリア本土外への追放に成功する（会戦自体は、痛み分け）。



以降、ガリア本土の平定に注力し、フランドル本国とプロイツェン、ロンバルド領の一部の平定には成功するものの、ブリタニア義勇軍や旧ベルガ領における反乱を平定することは出来ず、633年にはブリタニア軍の再侵攻を許すことになる。

なお、キルデベルドVI世陛下のカットは、たらこ果汁100%ジュースのきちでんさんに書いていただきました。海より深く、感謝であります。

ロンバルド大公ジョアッキーノ

本来はキルデベルドVI世の廷臣であり、主に外交交渉を担当していた。そのため、目立った武勲を挙げることはなかったが、625年のロンバルドに設置されたロンバルド辺境伯領の領主に封ぜられる。この人事に関しては、特に武官からの反発が大きかったものの、戦場での働きでなくても功績があれば栄達できるとして、文官・官僚には受けがよく、そういう意味でも成果があったといえる。また、これ以降必要になる教皇との交渉役として配置したとも言われている。しかし一方で、この人物はキルデベルドVI世の謀臣とも伝えられており、表に出来ない事情があったとも囁かれている。

ラ・ベル・アリアンス会戦においては帝国から離反し、連合国軍側に付くものの、ルーアン会戦では中立を保った。そ

れ以降は、再び帝国側に付くことになる。

謀臣として想像される人物像とは裏腹に、為人は温厚で知られ、敬虔な「時の主」の信者であった。その縁もあって、ゲーフェンバウアーとは親交が深かったと伝えられる。

ブリタニア歴 634 年、戦場においてパーシファル将軍により討ち取られる。

ブリタニア王国

ブリタニア女王
ローザ・ギネ・アヴァロン

至上の薔薇と謳われたブリタニア女王。幼少時は王位継承権が低かったことや、妾腹だったこともあり、市井にて成長した。この事が彼女の行動や、価値観に大きな影響を与えていることは間違いないであろう。

王位継承権が低いにもかかわらず、最終的に王座に就いた点では、フランドル国王キルデベルド VI 世と似ている。しかし、キルデベルドがある時期から自衛のために王位継承権競争に積極的に介入せざるを得なかったのと対照的に、ローザの場合は競争は存在しなかった。なぜならば彼女より上位の王位継承権を持つものは、冬薔薇こと、女王アンにより悉く殺されていたためである。

このようにして第一位王位継承権を得たものの、このことは即ち謀殺リストの最上位になったことを意味した。そのため、ローザはついに決起を決意することとなる。その際の根拠としたのが守り役であるトリストラム公の居城であるランカスターであった。

貴族や民衆の支持はすでに冬薔薇の元を離れていたため、後に薔薇戦争と呼ばれることになる革命に勝利を収め、ローザはブリタニア女王に即位する。しかし、それでも国を二分した争いであり、国力は疲弊し、双方の勢力の間で禍根を残しかねない状態であった。そのため、民心を治めるために行われた演説が「薔薇の宣誓」である。

ガリア本土における戦乱に対しては、基本的に不干渉の態度をとっていたものの、だからといって相手が遠慮するわけではなく、ブリタニア歴 627 年、彼女も戦乱に巻き込まれることとなる。当初は、国力も十分に回復しているとは言い難く、後退を余儀なくされるが、次第に戦況を盛り返し、629 年には帝国軍を国外へ追放する。

その後はガリア本土へ遠征、他国と同盟し対帝国包囲網を作り上げ、ラ・ベル・アリアンス会戦において帝国軍を撃破する。会戦後は、聖キルデベルド VI 世の提案を受け入れ、ベルセーヌ休戦協定会議に参加するが、会場となったヴェルセーヌ宮殿において、様々な意味で無二の存在であったアルヴァレスを失うこととなる。

その後、アルヴァレス暗殺についての謝罪と真相解明を求めてフランドル軍と単独で対立、ルーアン郊外にて大規模な会戦に及ぶ。この会戦は、双方に甚大な被害をもたらすものの、痛み分けに終わった。この会戦については、彼女自身、激情に駆られて強行してしまった面もあり、彼女の治世において数少ない失策の一つとしてあげられる。その後、一部の部隊を残してブリタニアへと帰還する。

しかし三年後、戦乱の平定と、新たなる国家像を掲げ、彼女は再びガリア本土へと遠征を開始する。

ブリタニア女王
アン・ギネ・アヴァロン

ローザの前代のブリタニア女王。また の名を冬薔薇。治世前半においては、失政も少なく、賢明な女王として期待された。しかし、年を経るに従い猜疑心が強くなり、偏狭的な行動が目立つことになる。自らの美と永遠を狂信し、それを脅かす王位継承権を持つものを次々と虐殺する。

結果としても、もっとも年若く、逆らうことさえ困難であろうと見くびり、自

ら王位継承権第一位に指名したローザ王女に反旗を翻されることになる。

パーシファル

雷槍の二つ名を持ち、槍技では右に出るものがいないと称されるブリタニアの勇将。薔薇の騎士団の第四騎士団長であり、女王ローザを心から敬愛している。性格は生真面目。融通が利かないと、ローザにも、トリストラムにもたびたび諌められるが、納得できてないようである。最も、ローザのそれは半分はからかいのようであるが。

出自は、身分の低い騎士の子であり、ローザとは幼少の時より親交がある。というよりも、幼なじみといった方が良いだろう。彼にとってローザは、崇拝する女王であり、守るべき妹であり、愛する女性でもあった。そのため、ローザがアルヴァレスを麾下に招き入れることを表明した際、もっとも強行に反発し、それ以降も事ある毎にアルヴァレスと対立することになる。

そのわだかまりも、ヴェルセーヌ会議の前夜、アルヴァレスの真意を聞くことにより、解消される。優れた僚友として、そして得難い友人として、彼を尊敬しようと決めた翌日に、悲劇が起こる。知ることがあまりにも遅かった自分に対して、二重の意味で大切な人間を守ることが出来なかった自分に対して、消しがたい悔恨の念を抱くことになる。また、本来であればローザを止めるべきであったルーアン会戦において、彼女に諌言することなく、結果として甚大な被害をもたらしたことにも責任を感じている。

ルーアン会戦後、ブリタニア軍本隊が帰国した後も、麾下の第四騎士団を中心に義勇軍を編成しガリア本土に残留、フランドル帝国に対する反乱活動の一端を担う。そのため、動乱後期の主な会戦にはほとんど参加することとなる。また、ゲーフェンバウアーに直接手を下した本人であるため、その甥である小ゲーフェンバウアーには敵として付け狙われ、度々戦場で対峙することとなる。

ルーアン会戦後もガリア本土に残った理由の一端は、アルヴァレス暗殺の真相を調べるためだったとも伝えられる。

トリストラム

銀狐の二つ名を持つブリタニアの宿将。薔薇の騎士団・第六騎士団の団長であり、ローザの守り役でもある。もっとも、元々王位継承権の低かったローザには正式に守り役が付いていたわけではなく、とある事情で遠縁の娘を預かることになったら、それがたまたま王位継承権を持っていた、だけの話らしい。

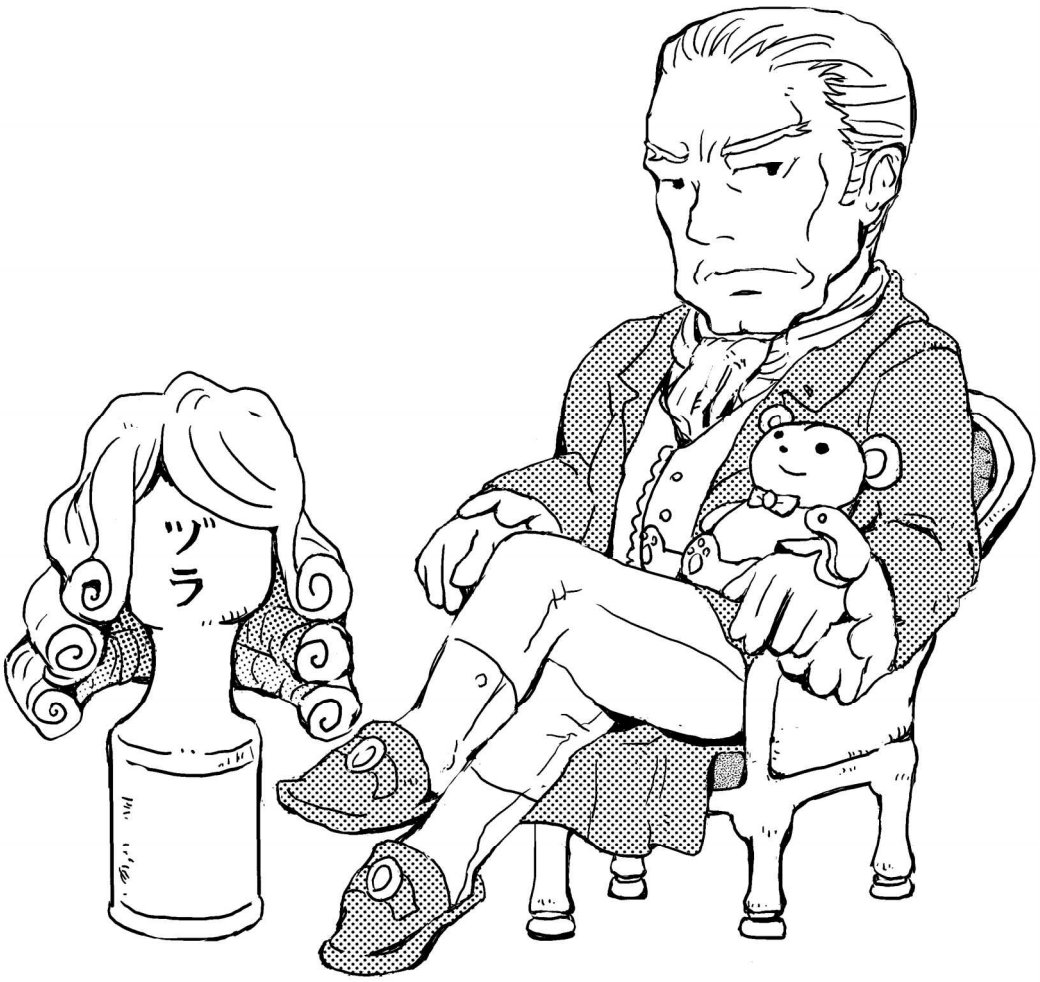
薔薇戦争においては、ローザ軍の実質的軍事指導者であり、なおかつ遠縁とはいえ親族であったことから、戦争後には騎士団総長、もしくは宰相の座に就くものと思われていた。しかし、それらの座に就くことなく自らの領地であるランカスターへと帰還し、地方守備に当たる第四騎士団の団長に収まった。

以降、中央のことは若い者に任せて、悠々自適の生活を送るつもりだったらしいが、時代のはそれを許さなかった。フランドル帝国軍によるブリタニア遠征時には、居城ランカスターを拠って防衛戦を行い、戦況逆転の機会を作ったと言っても過言ではない。また、ローザのガリア遠征時には本国の留守居役を任されていることからも、信任が厚いことが伺える。

ローザにとっては、数少ない我が儘を言える相手であり、パーシファルにとっては頭の上がらない師匠である。

また、孤立しがちであったアルヴァレスをブリタニア諸将の間を取り持ったのも彼である。

聖キルデベルドVI世陛下・異聞



ガリア全土を戦乱の渦にたたき込んだ張本人であるキルデベルドVI世であるが、その為人や生い立ちについては、様々な異聞があるのも事実である。

ブリタニア女王ローザと同様に、キルデベルドの場合も王位継承権の順位は低く（七～八位ぐらい）、さらに妾腹だったこともあり、譜代の家臣団も無く、本来であれば王位に就くことなどあり得なかった。

さらに、キルデベルドが王位に就くためにその初期において何か策謀を巡らしたかというとそういうわけでもない。幼少の頃から聡明で、しかし型破り（貴族・王族としての伝統を重視しない）だった彼は、周りからすればやっかいな王子様であり、そのまま行けば王家に皮肉を言いながらも自分自身も王族であるという矛盾した芸術家、ぐらいの役回りで人生を終えるはずだった（或る意味で、王位に就かなかったアレッサンドロ一世陛下）。

しかし、彼の兄弟、親族は非常に解りやすい感じで、伝統的な王族だった。暗殺、毒殺、謀殺、etc…。気づくと、競争者は着々と脱落し、王位継承レースに、好むと好まざると巻き込まれてしまう立場になっていた。

聡明ではあっても、善人ではない。売られた喧嘩は、100倍ぐらいにして返す。そんな感じの青年キルデベルドですので、巻き込まれたのならばしっかり勝ちに行ったようである。

ということで、王位継承権レースにおいて負け組に与したが故に閑職にとばされた人材の中で、有能な人を一本釣りでリクルートし短期間で家臣団を作り上げた。結果としてどうなったかは、彼がキルデベルドVI世として王位に就いていることが雄弁に語っているので（この方法は、対外的な征服戦争を始めたときにも、敵・味方を問わず有能な人間を登用する登用するとうい形で使われている）。

さて。青年キルデベルドは王位に就き、キルデベルドVI世となり、偉大なる王と

讃えられることとなる。但し、王者としても聡明で賢明ではあっても、善人ではないという部分は変わらなかった。

統一ガリア。他の君主が自らの国土を拡張することしか考えなかったのに対して、彼はより望ましい国家ビジョンとして、統一ガリアとうイメージを抱き、それを実現するために戦いを始めることになる・・・。

また、その為人を表す逸話として、

○強面。不機嫌じゃないときでも、不機嫌に見られる。王様、支配者としては威厳があって良いのだが、実はちょっと気にしている。

○ 実はかわいい系も好き。小動物系とか、小鳥とか。でも、人間、動物を問わず、威厳が有りすぎて避けられる傾向あり。

○「予の顔は、それほどまでに恐ろしいか・・・。」と、廷臣に問いかけ、返答に困らせたという伝説があり。

これらの逸話の真偽は、黒の予言書のみが知る類のことであるが、一部に伝えられる彼の肖像画にぬいぐるみを大事に抱えているものがあることも事実である。

路の標

～旅の手引き～

CD の中にある GARIA フォルダーをハードディスクにコピーしてください。
フォルダの中の GARIA.EXE を実行するとゲームが始まります。

操作は全てマウスで、左クリックで選択・実行、右クリックでキャンセルになります。
画面の上下左右にある点滅する三角をクリックすると、画面が移動します。
戦闘をするとヒットポイントが減りますが、街や城の上で待機すると、体力が回復します。

BGM は鳴りません。Chronicle　2nd のアルバレスの戦い、もしくは聖戦と死神をかけながらプレーするのをおすすめします。

勝利条件は敵の全滅です。

・・・・。

手抜きでごめんなさい orz....

ちなみに、このマップは負けるように作られています（汗）
雰囲気を感じていただければと(；´∀｀)

紡がれし物語

～ガリア戦史～

序章　紅い丘にて

紅い丘、緋い森
～ブリタニア歴622年 ヴェルケンラーテの戦い～

プロイツェン王国がベルガ王国に侵攻したことにより始まった戦い。

この会戦がガリア全体を巻き込む戦乱の引き金になるとは、仕掛けた側も、仕掛けられた側も思っていなかった。当事者たちとしてはいつもの国境紛争であり、仕掛けた側のプロイツェン国王、カール・グスタフ・リンデンバウムは領土が少しでも広がればいいと思う程度であったし、守るベルガ国王も多少損害はあるが、最終的には同盟国であるフランドルが援軍に来ることにより、守りきれると思っていた。

この状況を覆したのは二人の天才であった。一人は戦術の天才である、ゲーフェンバウアー（プロイツェンの黒狼。また、彼の直属の騎士団も黒騎士団と呼ばれる）の存在。彼はヴェルケンラーテ守備軍をほぼ壊滅状態に追い込む。当然、ベルガ国王の逐次投入の愚もあったのだが、それであっても彼の才能が否定されるものではない。もう一人はフランドル国王キルデベルドⅥ世。彼はこの戦いをガリア全土の均衡を崩すための切っ掛けにするためにあえて援軍を遅らせ、ベルガ滅亡を間接的にサポートした。

結果として、この戦いから歴史が流れ始めることになる。

オッフェンブルグ会戦の後、ベルガはプロイツェンに併合される。アルバレスはフランドルに亡命、また、生き残った多くのベルガの将兵もフランドルへと身を寄せることになる。後に、この将兵が中核となって亡命ベルガ人による部隊がフランドル軍内部に創設されることになり、アルバレスの前半における戦いの中心的戦力となる。

第一章　遙かな路

凶戦士の哄笑
～ブリタニア歴624年 第一次オッフェンブルグ会戦～

歴史的に見て、フランドルがベルガを同盟国として優遇し、プロイツェンの驚異から守ってきたのには当然理由があった。この両国の国境にはオッフェンブルグの森が広がり、騎馬による行軍が難しいため、攻めあぐねていたということ、ならば援助して対プロイツェン防衛に当たらせた方が妥当という考えがあった。

一方でプロイツェンにとっては、西方国境がフランドルとベルガに接することとなる。そのため、両国に対して兵力を均等に裂かなければならない。ベルガを占領下においた場合、総延長としての国境は大きく変わらないが、ベルガ南部からフランドルにかけての森林地帯は騎馬による行軍が難しいため、防衛のための戦力が少なくとも良いという考えがあった。それが当時の常識であり、実際に、ヴェルケンラーテ会戦後においては、国境北部に兵力を裂く必要の無くなったプロイツェンの圧力により、国境南部においては、フランドルの守勢一方となる。

この状況を見ると、先を読んでいたのはカール・グスタフの様に見える。しかし、その一歩先を読んでいたのがキルデベルドⅥ世である。確かに一時的には守勢になることが考えられるが、プロイツェンが南部戦線に主戦力を投入したということは、北部が手薄になるということであり、また、攻めての方が守り手よりも戦力が必要なのは自明である。さらに、南部国境はレイン川があるため、防衛線を構築が容易である。

つまり、プロイツェンの主力を南方に張り付かせておいて、その隙に北から本国を落とそうというのがキルデベルドの基本戦略である。では、なぜベルガが併合される前にこの戦略を実施しなかったのか。この戦略は、ベルガの視点から見れば同盟軍とはいえ他国軍が国内を通過することであり、国内が戦場になるということである。そのため、ベルガ王国として承伏できる物ではなかった。そのた

め、フランドル王国としては、ベルガには滅びてもらわないと困るのである。

このようにして、カール・グスタフとキルデベルドの思惑が絡み合って、ブリタニア歴624年が明ける。キルデベルトⅥ世は、戦線が膠着状態にあった南部戦線に対して、ベルガ解放を名目として、亡命ベルガ人部隊を中心とした戦力を投入した。この方面のプロイツェンの指揮官はゲーフェンバウアーである。本来であれば、麾下の黒騎士団もともに主戦場であるはずである。しかし黒騎士団は、新しく得た領土の守備を任せるという名目の下、旧ベルガ領に投入されている。なんとなれば、「君主より人望のある騎士などいらん」という事である。後にアルヴァレスも麾下の騎士団と引き離されるが、同じことがすでにここで起こっている、ということになる。そのため、ゲーフェンバウアー麾下の兵力は前回の会戦に比べ質、量ともに劣ったものとなっており、奮戦した物の、戦況全体を左右することは出来なかった。対して、フランドル軍、特に亡命ベルガ人部隊は故国の奪還ということで士気も高かった。

これが主戦場である南部戦線、オッフェンブルグ周辺の状況であるが、これ自体が、壮大な陽動であった。熾烈な戦場となることが予想される南部戦線に亡命ベルガ人部隊を投入する一方で、フランドル軍の最精鋭部隊を北方戦線に投入、旧ベルガ領を通過、アルデンヌの大森林地帯を一気に突破し、プロイツェン本国を強襲した。北部国境線の兵力は旧ベルガ国内に散在していたため、組織的な抵抗を行うことが出来ず、結果として全兵力を有効に利用することなく、プロイツェンは国家としてフランドルに下ることとなる。

なお、この当時の慣例として、プロイツェン国王は処刑されることなく幽閉の身となる。また、南部戦線においてもプロイツェンの守備軍はほぼ壊滅し、ゲーフェンバウアーもフランドルの虜囚となる（ただし、国内で優遇されていなかったことをうまく突き、キルデベルドが麾下に納めることとなる）。

銀嶺を越えて
～ブリタニア歴8年 ロンバルド攻略戦～

フランドルによるプロイツェン併合は、ガリアにおける大きな政治的変動をもたらした。

この地域ではローマン帝国の滅亡以降、フランドル、プロイツェンの二大国があるものの、それら全てを統べる大帝国は存在しない状態が4、5世紀続いてきた。しかし、プロイツェンの併合によりこの構図が崩壊し、フランドルという大国と、中・小の国家、もしくは封建領主という構図になった。そのため、各国王、封建領主としては、フランドルと対立するか、それとも取り入るかの判断を求められることになる。

そのなかでも特異な立場に立ったのが「教会」である。

時を統べる唯一神、「時の主」信仰の中枢である「教会」は、かつてのローマン帝国の治世下において絶大な権力を誇った。これは、ローマン帝国のおける国教が「時の主」信仰であったためであり、同時に、「教会」により、ローマン帝国皇帝は地上の栄光だけではなく、天上の栄光の代行者としての地位も任されていたからである。

しかし、ローマン帝国崩壊後、かつての栄光は失われていた。しかし、フランドルの台頭は、ローマン帝国の再興を想起させるものである。

しかし、状況はそれほど単純ではなかった。一つには、教会の本拠地であるローマーナとフランドルの間には、天険アルパインがあるために、両者の連携が阻害されていること。もう一つは、ガリア北方民族が建国したンバルド王国が、両国間の交流を妨げていたからである。

キルデベルドの野望はローマン帝国、否、新ローマン帝国としての神聖フランドル帝国の設立であり、そのためには「教会」の権威が必要であった。「教会」としては、かつての栄光を取り戻す、それよりも何よりも直近に迫った北方の蛮族

を排除するには、フランドルの力が必要だった。ここに両者の利害は一致し、「教会」はフランドル王国に対してロンバルド王国への侵攻を要請した。

戦略的には極めて合理的な選択であるロンバルド攻略であるが、戦術的には極めて困難な選択である。天嶮アルプスを越えるには、多くの峠があるが、フランドル領グルノーブルからの侵入が可能な、ロータレ峠、プロイツェン領を経由するブレンナー峠、そして、最高峰のすぐ近傍を通るグラン・サン・ベルナール峠が有力である。フランドル軍はグルノーブルに主力を集めつつ、グラン・サン・ベルナール峠にベルガ人部隊を配置した。ロンバルド軍が主力部隊に対応している間隙を付いて、アルヴァレス率いるベルガ人部隊にたいし、グラン・サン・ヴェルナール峠を越え、本隊と対峙するロンバルド王国軍の後背を突くことを命じた。

なお、ロンバルド王国攻略が完了した後も、皇帝の座は「教会」からは許されなかった。これは、「教会」の主である教皇の為人がキルデベルドの思惑から外れていたからなのか、それともそれをも思惑のうちだったのだろうか。それは解らない。ただ、事実としては、教皇が崩御し、新しい教皇が即位した。その教皇の名において、キルデベルドが「神聖フランドル帝国」の初代皇帝となった、という事実だけである。

敵中侵攻 ～ブリタニア歴 62年 カスティリア遠征～

プロイツェンとロンバルドを攻略したキルデベルドIV世にとって、残された攻略対象は、カスティリアとブリタニアである。この両国は、プロイツェン、ロンバルドと決定的に違う点があった。それは、宗教である。

ロンバルドの支配階級が「時の主」を信仰していたかどうかは不明だが、一般領民はやはり「時の主」信仰が主だったと考えられる。

しかし、カスティリア王国（この言い方も、ガリア側からの言い方であり、当人達としては別の言い方があったと思われる）の住民は「ムハマンドの教え」を信奉するものも多く、ブリタニアの住民は、「光の女神」を主神とする多神教を崇拝する人々であった（しかし一方で、ブリタニアはかつてのローマン帝国の系譜に連なる国家でもあり、宗教も一定影響を受けていると考えられる）。

いわば、カスティリアへの侵攻は、キルデベルドの戦略が、思想的にだけでなく、実際の軍事的にも単なる「領土の拡大」から「帝国の建設」へと変貌したことを示すものである。

なお、この新帝国建国の第一歩となる遠征については、ブリタニアを攻略目標とするか、カスティリアを攻略目標とするか、フランドルの廷臣は言うに及ばず、キルデベルド自身もかなり葛藤しただろう。おそらく、地理的には、陸続きでるカスティリアが適当であったろうし、政治的には若き女王ローザによる薔薇革命直後の混乱から十分には抜け出せていないブリタニアの方が適していたろう。

結果として、カスティリアが攻略対象となり、ブリタニアは新しい薔薇の下、復興を遂げることとなる。この事が持つ本当の意味を知るものは、今はまだ誰もいない。

さて、新帝国建国の嚆矢となるべき遠征であるが、その実現には、多くの戦術的課題があった。

まずは、地形的な要因。陸続きとはいえ、ガリアの二大天嶮の一つであるピレーネが両国国境を分断している。加えて、フランドルの国力も、連年の遠征により疲弊しつつあった。

そこで戦略としてとられたのが、アストゥリアス公国の利用である。キルデベルドはアストゥリアス公に対して、フランドル国内での同等の地位を保証する代わりに、フランドル王国との併合と国軍の領内通過を要求した。

アストゥリアス公はこの条件を受諾（なお、アストゥリアス公国は、旧ガリア帝

国の流れに連なる王国であり、カスティリアに従うよりは、フランドルに従う方が受け入れやすかったという面もある)、アルバレスをはじめとするフランドル国軍は、ピレーネを西方から迂回し、アストゥリアス領内を通過した。当然、ピレーネ山脈のフランドル＝カスティリア国境には、陽動としての兵力が配置されていたため、カスティリアの主力部隊はそちらに対応していた。

当然、アストゥリアス公国国境にもそれ相応の兵力は配置していただろうが、結果としてそれは及ばなかった。フランドル国軍のうち、アルバレス率いる先遣隊の動きは迅速を極め、カスティリア軍北方駐留部隊とカスティリア国軍本隊の間に楔を打ち込む形になった。

ただし、フランドル国軍先遣隊も状況は似たようなものであり、一歩間違えれば所ではなく、本質的には挟撃の危機にあるといえる。なおかつ、フランドル国軍のフランドル人諸将は、敢えて積極的にアルバレスを援助する意志はなかった。ただし、カスティリア軍は本隊も北方駐留部隊も先遣隊の規模を正確には把握していないことが、唯一の光明であるとも言える。すなわち、ここにおいて自軍の規模を悟られる前に北方駐留部隊を撃破、アストゥリアス公国領とピレーネ守備隊と間の戦線を連続させ、自らの安全を確保する事がアルヴァレス率いる先遣隊の戦術的目標となった。

以下、鋭意制作中(汗)

第二章 新天地

薔薇の騎士達
～ブリタニア歴 627年 第一次カンタベリー会戦～

神聖フランドル帝国による初の遠征。

運命との邂逅
～ブリタニア歴 627年 グラスミアの戦い～

ローザ・ギネ・アヴァロンとアルヴェール・アルバレスの邂逅

王都奪還
～ブリタニア歴 628年 ロンドン奪還戦～

フランドル帝国に占領されていたロンドンの奪還戦

ガリアへの路
～ブリタニア歴 629年 第二次カンタベリー会戦～

ブリタニア領内に残存するフランドル帝国軍との最後の大規模会戦。

第三章 岐路

遙か遠き故郷
～ブリタニア歴 630年 ラ・ベル・アリアンス会戦～

ブリタニア国軍、ガリア本土に上陸。各連合国として、旧ベルガ領ラ・ベル・アリアンスにて帝国と会戦。

誰が為の、戦い
～ブリタニア歴 630年 ルーアン会戦～

ベルセーヌ休戦協定会議でのアルヴァレス教暗殺を受けて起きた、ブリタニア王国とフランドル帝国間の会戦。

第四章　ガリア動乱

終章　再び、紅い丘にて

ローザ・ギネ・アヴァロン、ベルガ王国領ヴェルケンラーテ近郊において、ルーナ・バラッドと邂逅。

或る抜け落ちた頁

初めての人は、初めまして。いつもの方は、いつもお世話になっております。つくば泥酔パレード研究所のわたGと申します。

ということで、後書きです。

んと、実際にはまだ作業中です（汗）

でもまぁ、なんだ。その昔、偉い人は、「本文なんか読まないよ、後書きだけだよ、読むの」とおっしゃったらしいので、後書きはちゃんと書かないといけません。

そもそもこんな事をやると言い出したのは、私自身がFire EmblemとうシミュレーションRPGが好きだったことに端を発します。そのシステムと「聖戦と死神」の世界観が一緒になったらどうなるか・・・。たぶん、多くの人が思ったことでしょうが、まだ、実際に形にはなっていないと思いました。

もっとも、本当は制作した方がすでにいて、私が知らないだけなのかも知れません。

でもまぁ、やるなと言われているわけでもないし、自分自身の「聖戦と死神」の世界観を形にするのも良いかな、ということでこんなもんを作ってみました。

とはいうものの、ゲームとしてはまだ形にもなってないし、設定としても半分ぐらいしかかけませんでしたが（汗）

実際にこの企画が形として走り始めたのは、今を去ること数ヶ月前（汗）、「守護聖人の祭」の日にワインを飲むぞとなった際に、SHオンリーイベントの開催も決まったことだし、なんかネタでも作っていくかと、アイディアを書いていったのがハジマリでした。

それ以降、いろんな方のお世話になって、とりあえず本日を迎えることが出来ました。

まず、最初に感謝したいのは「守護聖人の祭」をご一緒した、CAZさん、ウィルさん、イットンさん。皆さんが、「おもしろいんじゃねー」といってくれなければ、そもそもやる気にならなかったと思います。特にCAZさんには設定から、地理的な情報から、色々お世話になりっぱなしでした。本当に有り難うございます。また、サンホラー仲間としては一番長いつきあいで、生暖かく見守ってくれた黛さんにも、心からの感謝を。

今回、たらこ100%果汁のきちでんさんにカットを書いていただきました。きちでんさんの描く絵には、いつもいつも、癒やされております。次の機会があった際にも、是非お願いしたいと思います m(__)m

SHを語る際に忘れてはならないクロニカ学習帳の管理人、ぐっこさんとシドウミツキさんにも感謝を。お二人が作られた学習帳というサイトがなければ、ここまでSHに嵌ることもなかったと思います。・・・それはそれで良かったのかも知れませんが、きっと寂しい世界だったでしょう（汗）

特ににぐっこさんが書かれていた「聖戦と死神」の考察が、「これならSRPGでいけるんじゃないか？」という切っ掛けの一つになっています。ありがとうございます。

left sideの左さんにも感謝を捧げさせて下さい。氏のサイトの「なんちゃってゲーム企画」。最終的目標はあれですが。・・・いや、そこにたどり着くまでには、それこそ光年単位の距離がありそうですが（汗）

そして、幻想楽団・Sound Horizonを主催するRevo陛下、胡散臭さ炸裂のJimangさん、歌姫、YUUKIさん、KAORIさん、REMIさん、RIKKIさん、Jakeさんを始め幻想楽団の皆さん。そして、Aramaryさん。Sound Horizonに出会えたおかげで、私はかけがいのない人々と繋がることが出来ました。本当に、有り難うございます。

最後に、全てのSound Horizonを愛する人々に感謝を。

これが私のRomanです。

皆さんに繋がることが、出来ましたでしょうか？

GARIA 622-635 設定資料集 Ver. 0.1

本設定資料集は Sound Horizon が制作した音楽 CD「Chronicle 2nd」の二次創作物であり、原曲の著作権は Sound Horizon にあります。
また、本書における設定は「Chronicle 2nd」および他の Sound Horizon の楽曲の公式設定とは何ら関係がありません。

本設定資料集自体の著作権は、イラストに関してはたらこ果汁 100%ジュースのきちでん氏が、文章に関してはつくば泥酔パレード研究所が有します。なお、文章に関しては、いかなる金品の授受も伴わない場合に限り、再配布・二次使用を制限しません。

光の女神の祝福があらんことを！！

2007 年 5 月 5 日発行
発行者　つくば泥酔パレード研究所
URL: http://wata909.la.coocan.jp/blog/parade/
Mail: wata909@gmail.com

つくば泥酔パレード研究所 Presents